

文ぎつね

敬具

八月の終わりだった。

暑さの名残が残りつつも、まるで一日が夜から秋に入っていくようだった。

サークルの飲み会（といっても俺は未成年なので酒は飲まないが）から帰ると、アパートの投函口からベージュの封筒がはみだしていた。引っ張り出してみると、広告にしては丁寧に封がされている。差出人を見る。

佐渡泉。

封を切る手が止まった。

佐渡泉。彼女と最後にあつたのは中学校の卒業式だったか。いや、駅まで送りだしに来てくれたはず——いずれにせよ、もう三年以上ほどあっていない。年賀状のやり取りだけは細々と続けているが、「今年もよろしくお願ひします」を送りあうだけの淡白なものだ。

なぜ手紙がこの時期に。よぎる思考を一度振り払って、中の手紙を取り出した。

拝啓

ようやく暑さも冷めやり、過ごしやすい季節が近づきましたね。

榎原秋介さま。急な手紙で驚くかもしれません。もし時間があれ

ば、一度、水門瀬町に帰ってきませんか。久しぶりに会っていろいろ話したいです。

彼女らしい端正な文字だった。しかしひとときわ目を引くのは、

「水門瀬町」の文字だった。

水門瀬町。高校に入学する前まで俺が住んでいた町だ。

川沿いの通学路。錆びたガードレール。いつの間にか閉店した駄菓子屋。そしてため息が出るほど広い青空。思い出すどの景色の中にも、佐渡がいる。

未練はある。高校進学と同時に、俺はあの町を出た。佐渡は町に残った。

当時は素直に認めなかったが、俺は確かに佐渡のことが好きだった。朝、教室に入ってまず目にするのは彼女だった。彼女が休んだ日は元気が出なかった気もする。下校中にわざと先に走って、振り返っては俺のことを待つその笑顔の前では、一日の疲れなど気にならなかった。

正直、今でも心は水門瀬町に置き去りになっている。

一度、帰ってきてみませんか。彼女はそう書いた。戻れるのだからか、あの日々に。

スマホの通知が鳴った。

『再来週の飲み会、参加投票』

サークルの連絡だった。今日も飲み会だったというのに、もう次の予定を立てているらしい。正直、飲み会は嫌いじゃない。酔って口数が増えた先輩を見ているのは楽しいし、同期との仲も良好だ。酒は飲んでいないはずなのに、俺まで酔ったような気分になる。それでも。

俺は「参加しない」に票を入れた。

約束の日は休日、天気は曇りで、電車の中は出かける人々こそいたがあまり混んでいなかった。そろそろビルの間を抜ける。だんだんと建物の背が低くなっていき、道幅が広くなってゆく。

乗り換えの駅に泊まると、いかにもこれからテーマパークへ行きます、といった風貌の学生たちとすれ違いながら電車を降りた。小さい駅だ。次に乗る電車までは二十五分ほどある。

ホームを生ぬるい風が吹き抜けていき、湿った草のおいがした。ポケットに手を入れると、カサリと音がした。佐渡からの手紙だ。約束の日程が書かれている。SNSのアカウントなりメールアドレスなりを手紙に書けばよかった、と今になって気づいた。

不意に、駅のアナウンスが鳴った。耳を傾ける。まもなく、二番ホームに――。

ホームの反対側だ。ため息をついてベンチに座る。

その電車はすぐに来た。誰も降りず、誰も乗っていない。おそろくこの駅にいるのは――駅員さんが常駐しているかもしれないが――俺だけだ。風の音すらしなかった。

電車は十分ほど停まった後、再び走り出した。電車にせき止められていた風がぬると吹き込み、じめじめとした感覚は俺をいらだたせた。時間がゆっくりと流れているようだった。

乗るべき電車は、時間通りに来た。周りは先ほどとは打って変わって田畑、その奥に山々が深緑色の影となって連なっている。

ぼつぼつと窓を叩く音がして、煙雨となった。山はすぐに見えなくなり、白い靄の中を電車は孤独に走っている。

幸先の悪いことだ、と何度目かのため息をついた。約束では、佐渡は駅まで来てくれることになっている。彼女にこんな中を来させるのは申し訳なかった。

窓の外はどこまで行っても田んぼで、雨の靄で遠くが見えないこともあり、二度と出られない不思議な霧に迷い込んだようだった。さあさあと吹き付ける不規則な雨音は何かの囁き声のようだ。

スマホで天気を調べると、どうやら今日はもう晴れないらしい。秋雨前線は早めの訪れ、今も頭上に伸びている。水門瀬町に滞在する間、ずっと雨かもしれないと思うと、ますます憂鬱だった。

まもなく水門瀬町駅、と車内アナウンスが平坦に言った。不思議な期待感に見舞われた。

アナウンスから駅に着くまでは落ち着かなかった。何度も窓の外を見た。何か見覚えのある物は、景色はないだろうか。靄しか見え

ない。

電車が止まった。はやる気持ちのままに電車から降りると、何の変哲のないホーム。やけに歩きやすい。

改札に迎え入れられた先に、彼女はいた。灰のコートを着た彼女は一瞬、知らない人のように見えた。記憶の中の彼女よりもずっと背は伸び、ふわりとした髪は長くなっていた。

声をかけようとして、前触れもなく目が合う。と彼女は目を丸くした。まずどんな言葉をかけるべきか、用意していた言葉は肝心な時に出てこない。それは彼女も同じようだった。

あまり長く目を合わせているのがこそばゆくて、久しぶり、とだけ言った。彼女も同じように返す。目を逸らす直前、彼女の目は確かに笑っていた。間違いなく、佐渡泉の笑い方だった。

駅の外に出ると、相変わらずの雨だった。折りたたみ傘を差すと、彼女は少し間をおいて自分の傘を差した。こんな雨にさえ、彼女は似合ってしまう。

他愛のない会話をしながら歩き、少しして会話が途切れる。あまりに久しぶりで、互いにどう接すればよいのかわからず、それを繰り返す。

そして何度目かの沈黙。近くの金網フェンスを伝って落ちる雨水の音と傘を叩く雨音が気まぐすい静寂を埋める。

「ごめん、急に呼び出して。遠いのに」

彼女が口を開いた。彼女の声は記憶よりも低く、滑らかになって

いた。

「それは気にしなくていいけど、急にどうした？」

「会っておきたいなと思って」

含みを持たせた言い方だった。何か別の理由があるのだろう。それは彼女の、隠し事をするときに首を触る癖からもわかった。

そうしているうちに、なんだか暑くなってきた。

傘の淵から空を除いてみると、光。

「お、晴れてきた！」

彼女は弾むような声を出した。

雲間から伸びた光の筋は次第に晴れ間を押し広げ、暗雲は割れていく。そしてひととき強い光——太陽が姿を現した。

その瞬間、靄は消え失せた。青空が広がり、山々が姿を見せ、広い山間に起伏に富んだ町が姿を見せた。電柱も、家々の屋根も、遠くに見える白い鉄橋も、雨に濡れて極彩色に輝いている。

「おーい、置いていくよー！」

いつの間にか佐渡が走っている。緩い上り坂の上で、彼女は小さな傘をさしたまま、振り返った。傘の雨粒がきらきらと反射する。その瞬間、俺は理解した。ようやく俺は、水門瀬町に帰ってきたのだ。

置き去りにした心を取り戻したようだった。

承

水門瀬町に滞在する予定の三日間、俺は佐渡の実家に泊めてもらうことになっている。佐渡は今も実家で生活していて、水門瀬町の外で生活したことはない。だから、この町は彼女にとって特別な場所ではない。

俺はもどかしくなった。今俺がみている水門瀬町のどれだけ美しいことか。その美しさを佐渡にも知ってほしかった。

「懐かしすぎて泣きそうになるよ」

「大袈裟だなあ」

前を歩く佐渡にわざと感慨深く言ってみると、彼女はけらけら笑いながら振り返った。

「第二公園とか、覚えてる？ でっかい滑り台あるところ」

「ああ、覚えてるよ。ブランコもあった気がする」

「そうそう！ 今もあるよ。行ってみる？」

「そうだね、久しぶりに行ってみたい」

了解、と彼女は言うのと、歩みを遅くした。不思議がる俺の後ろに立つと、

「それじゃあ、秋介がどれだけ道を覚えているか、確認テストといこうか」

いたずらっぽく言った。

「俺の記憶力をなめてもらっちゃ困る」

俺は自信満々に答えた。

結果として、俺は公園にたどり着くことができた。しかし、見覚えのあるブランコが風に揺れている中。

「滑り台が、ない……」

「残念、ここは第一公園でした」

佐渡が面白がっている。知らず知らずのうちに町のことを忘れてるのが悔しくて、そんな気持ちをごまかそうと俺は言い返した。

「来る途中に言ってくれよ」

「それじゃテストにならないじゃん」

「それはそうだけど、なんかなあ」

「ケアレスマスだよ、ドンマイ」

佐渡はブランコに飛び乗ると、押して、と言いこぎはじめた。このマイペースの塊がかしこまった年賀状を毎年書いていると思うと、笑えてくる。こんな風に彼女に振り回されても、なぜか悪い気はしなかった。

公園のブランコは子供用で、大学一年生には高さが低すぎた。しっかりと押そうとすると屈まなければならなかったし、佐渡は佐渡で足を必死にたたんで、足を地面に擦らないようにしていた。こんな窮屈な姿勢では、飽きるのにそう時間はかからない。案の定、彼女は飛び降りると、大袈裟に手を広げて着地した。

「今何時？」

「午後四時」

「微妙な時間だねえ」

彼女はブランコの周りにある柵に座ると、鼻歌を歌い始めた。聞いたことない歌だった。話しかけたかったが、鼻歌を遮るのも少し申し訳なくてタイミングが読めない。そうしていると、鼻歌がどこか不安げになった。うろ覚えのパートらしい。

「散歩というか、思い出の場所巡り、付き合ってくれる？」  
ここぞとばかりに言うと、彼女はうれしそうにうなずいた。

だんだんと影が伸びてきた。俺はかつて通った水門瀬中学校を訪れた。週末にもかかわらず、校庭では野球部員たちの叫び声が響き、後者からは吹奏楽部の演奏が聞こえる。三年と少し前まではすぐそばで聞いていた音を、今は柵の外から聞いている。

ふと佐渡のほうを見ると、目を細めていた。夕日が眩しいのか、懐かしさに浸っているのか、いずれにせよ、どこか寂しさのようなものを含んでいた。

しばらくはそのままだった。会話もなく、ただそこにある景色を眺めているだけ。

冷たい風が吹いた。一枚の葉がからからと、俺たちの間を通りぬけていった。

「帰ろっか」

佐渡が呟くように言った。先ほどのマイペースな声とは違い、駅の時のような、遠慮を含んだ声だった。

考えてみれば、佐渡の家に来るのは初めてだ。

「ほら、昔はあったでしょ？ 学校近くの駄菓子屋。もうお歳らしくて、少し前に閉店しちゃったのよ」

佐渡のお母さん（彼女の苗字ももちろん『佐渡』だが）は饒舌な人だ。夕食を作りながら、ずっと話続けている。フレンドリーな性格で、小さいころにはよく遊んでもらった。

「今まであったものがどんどんなくなっちゃって、寂しくなるわよねえ。シューちゃんが引越した時なんか、泉がふてくされちゃって…」

「ちよっと、お母さん…」

佐渡は寝転がってスマホを見ていたが、首だけこつちを向けた。彼女のここまでアットホームな姿を見るのは初めてで、見てはいけないものを見てしまったような感じがして目を背けた。

佐渡がゴロゴロと転がっている一方で、俺はつかしこまってしまふ。人の家に泊まらせていただくというのは、どうにも慣れない。

「泉もスマホばかり見てないで、シューちゃんとお話したら？ また会えるのはいつになるかわからないよ？」

「秋介はあと二日いるじゃん」

佐渡は、親御さんと話すときはいつもよりも無愛想になる。お母さんが、ごめんねえ、この子まだ反抗期みたいで、という間もスマホと睨めっこしている。しかしときどき会話に入ってくるので、聞き耳は立てているのだろう。落ち着かなさそうに前髪をいじっている。

た。

「シューちゃんの好物だって泉が言うから」

という言葉とともに出された夕食は、回鍋肉だった。佐渡もそのころには起き上がって、静かに食卓に着いた。いただきます、という声が重なり、あつという間に大皿の回鍋肉が食べつくされた。佐渡は食べる量が少なめだったが、それでもおなか一杯といった具合のしぐさを見せた。ここ数年で一番おいしい回鍋肉だった。

寝床は、佐渡は二回の自室、俺はリビングに布団を敷いて、佐渡のご両親は和室に布団を敷いて寝ることになった。食後に佐渡のお父さんが帰ってきたが、挨拶を交わしてお風呂に入るとさっさと寝床へ行ってしまった。

俺は湯船の中で、今日あったことを反芻した。家を出てから今までが全て「今日」に含まれるのが信じられなかった。とにかく出来事が多かった。しかし何より気になるのは、佐渡が何か隠し事をしているということだ。彼女は隠し事が下手だ。お母さんから聞き出すという手もあったが、無理に暴きたくはない。その気になれば、彼女の口から話してくれるはずだ。そうわかっていても、胸中に霧がかかるような気持ちになるのだった。

お風呂から上がってしばらくすると、佐渡のお母さんが寝室に向

かい、同時に佐渡も自室に向かった。どうやら二人とも、俺が気づかないうちにお風呂に入っていたらしい。

リビングに一人残された俺も、特にやることもなくなり、そのまま寝ることにした。電気を消して目を瞑ってみたが、なかなか寝付けない。夏の終わりとはいえ、雨の後で蒸し暑かった。

ふと、足音がした。見てみると、佐渡がそろそろと階段を下りてきている。暗闇の中で何をしているのか見ていると、彼女も気づいたらしい。

「ごめん、起こしちゃった？」

と小声で言った。まだ寝てないよと伝えると、再び歩き出し、キッチン水道で水を飲むと、自室へ戻り始めた。何を期待していたのか俺は少し残念に感じたが、一方でそろそろと歩く彼女の姿はやけに珍妙で笑いをこらえなければならなかった。

彼女は最後に、おやすみ、と言い残していった。その四文字は、一層俺を眠りから遠ざけるのだった。

転

二日目には特に決まっていなかったが、せっかく水門瀬町に帰ってきたのだからと、町のすぐ隣にある日観山という山に登ることになった。あまり標高は高くないので普通着でも登れてしま

うような山だが、頂上からの景色は類稀な美しさだ。

佐渡のお父さんが先を歩き、俺と佐渡は後ろについていった。佐渡のお母さんは虫に刺されたくないからと来なかった。

家から登山道まではそう遠くない。歩いて向かっていると、ふと気づく。普通った通学路だ。すぐ横を小川が流れていて、耳触りの良い水音が今も聞こえる。確か、この先には。

見えた、水門だ。江戸時代に作られたもので、今こそ小川だが、昔は大きな川をせき止めていたらしい。水門瀬町の名前の由来はこの水門だ。

「昔さ、ここに遊びに来たことあったよね」

佐渡が言った。そういえばそんなこともあった。学校から水門には近づくかという言われていたが、いうことを聞かずに佐渡と遊びに行ったのだ。そして案の定、苔に滑って頭を打ち、大きなたんこぶを作ったのだ。

「今はさすがに転ばないよな…」

そういつて水門に近づこうとすると佐渡に襟首をつかまれた。

「すぐそうやって怪我しに行く」

呆れた声で言った。

「昔から変わってない」

今度は少し嬉しそうだった。

変わっていないのはどっちだ、と言いたくなかったが、俺に比べれば彼女のほうが変わっているかもしれない。

思えば、この町は俺が過ごした時とほとんど変わらない。駄菓子

屋はつぶれてしまったし友人たちも他の土地に行ってしまったが、それでも山によって隔絶されたこの町は、まるで過去の追憶がそのままあるようだった。

一直線の、停滞した時間の中を彼女は生きてきたのだろうか。

山登りは、思いのほかきつかった。中学生の頃に比べて体力が落ちていのだろうか。それに比べて佐渡と佐渡のお父さんはすいすいと登っていく。登山において、敗北感ほど重い荷物はそうそうないだろう。

結局、俺が頂上に着くころには、二人は昼食を半分以上食べ終えていた。

遅いねえ、とからかってくる佐渡をにらみつつ弁当を開こうとすると、

「おい、秋介」

と呼ばれた。見ると、佐渡のお父さんが手招きしている。近寄って、息が漏れた。

彼の見ている先に、空があった。そして山の稜線があり、ジオラマのような水門瀬町があった。

「大学ではうまくやってるか？」

佐渡のお父さんに尋ねられた。無口な彼がここまで踏み込んだ質問をしてるのは珍しかった。

「まあ——うまくやってるほうだとは思いますが。前期単位も落とす

「いませんし」

「一人暮らしで寂しくはないか？」

「初めは少し寂しかったんですけど、もう慣れました」

ここまで答えると、彼は黙り込んだ。かれが何を考えているのか、俺には読めなかった。やがて彼は結んだ口を緩めて一言、それはよかったと言うと立ち上がった。

「いつまでもこの町にいるわけにもいかないもんな」

彼は背を逸らして伸びをしながら言うと、佐渡のほうへ歩いて行った。

下山を始めるころには、日が沈み始まっていた。夜になってはずいと急ぎ足で下り、途中で転んで手のひらを擦りむいた。

家に帰ると、夕飯の支度がされていた。メニューは俺の好きな和食で、肉よりも野菜が多かった。

昨日と同じように食事をとり、同じように寝る準備を始めた。佐渡のお母さんは相変わらずおしゃべりだった（「明日でお別れあ、寂しくなるねえ」）。佐渡のお父さんは風呂呂に入ってすぐ寝室に行ってしまった。

唯一違うことと言えば、佐渡の様子だった。昨日はゴロゴロと転がっていたが、登山で疲れたのか、明日俺が帰るのを寂しがってくれているのか、やけに元気がなかった。

布団を敷いて寝ようとすると、佐渡がやってきた。風呂上がりの彼女は俺の隣に静かに腰を下ろした。髪がいつもよりフワフワと広がっていた。

何の用か測りかねたまま、数分が過ぎた。彼女は時々何か言おうとしていた。俺は緊張と気まずさに耐えかねた。

「あの――」

「私ね」

佐渡が俺のほうを向いた。その瞬間、俺は体の中が大穴になってしまったような感覚になった。佐渡は、今にも泣きそうな顔をしていた。

「アメリカの大学、行くことになった」

彼女は一息に言い切った。そして深く息を吸ってはいた。

衝撃はなかった。駅で会ってからときどき、彼女の様子がおかしかった。代わりに体の大穴がじわじわと広がった。浅い息をしないと、真つ暗闇に落ちてしまいうさそうだった。

「そうなんだ、まあでも会えないのは今までも同じだったし、メールもあるし――もしかしたら大学出た後に俺もアメリカ行くかもしれないし――」

俺の震えた声を、彼女は黙って聞いていた。話し続けていないと、俺のほうに先に泣いてしまいうさそうだった。佐渡のほうがつらいはずなのに。

「いつ頃に行くの？」

「秋入学だから、あと二、三週間後」

そして沈黙。こんな時まで気の利いたことを言えない自分が情けなかった。そしてそれ以上に、佐渡を泣かせたくはなかった。

「もしまた時間ができたらさ」

今度は俺が会いに行くよ。次こそはもつと一緒にいよう。出てくる言葉はどれも口から出てこなくて、

「また会ってくれる？」

泣いている子供みたいに細い声を出すのが精いっぱいだった。

そんな俺の姿を見て、佐渡は微笑んだ。辛はずだ。悲しいはずだ。それなのに、彼女は笑った。

「やっぱり昔と変わってない」

そう言って彼女は立ち上がった。おやすみ、と言葉を残して寝室へ上がっていった。

## 結

秋介が水門瀬町を出るとき、お母さんは電車で食べな、とお菓子をいくつかあげた。佐渡のお父さんは、何も言わず、秋介の背を軽く叩いた。秋介は最後まで泣かなかった。昨日の夜はあんなに声を震わせていたのに。彼の私が好きだったところは、昔も今も変わらなかった。

電車のドアが閉まる。こみ上げるように音が高くなり、走り出す。不思議と、走って追いかける気にはならなかった。私はただ、唇をぎゅっと閉じながら、電車が去っていくほうを見ているしかなかった。

四年と少しが過ぎた。俺は飲み会に誘う側になった。秋風が吹き、木々は紅く染まり始めている。

ふと、スマホを見る。いつのまにか、意味もなくスマホの画面を開く癖がついてしまった。とうとう俺もスマホ依存症か、とため息をついた。

佐渡がアメリカにわたってからしばらくの間、俺たちはメールを送りあっていった。水門瀬町の思い出、最近の出来事、誕生日のお祝い……メールの頻度は減り、ついに年初めの挨拶だけになった。

四年前水門瀬町に行ったとき、俺は過去に触れた。佐渡と会い、彼女に対する気持ちを思い出した。彼女も同じはずだった。それなのに、彼女は最後まで泣かなかった。

佐渡のお父さんが背中を叩いた意味を、俺はもう知っている。佐渡はもうとつくに気づいていたことだ。

水門瀬町から帰った後、俺は目まぐるしい時間にさらされた。

駅では誰もが急ぎ足で、俺もその中に混ざっていった。

飲み会に誘われ、課題をこなし、バイトで走り回った。彼女もできた。そして些細なことで別れ、また一人。そんな日々に、俺は少

しだけ安堵した。もう、あの頃の君を追いかけなくていいのだ。引きずっていたものはいつの間になくなっていった。

時間の流れとは人を無理やり前に向かせるのかもしれない。

そんなときに、郵便受けが鳴った。見ると、かつて俺を過去へ呼び戻したクリーム色の手紙。

宛名は、佐渡泉。止まることなく封を開く。今度は俺は、未来へ呼ばれた。

拝啓

あの頃の続きとなる季節がやってまいりましたね。

榎原秋介さま。急な手紙で驚くかもしれません。もし時間があれば、もう一度、水門瀬町に帰ってきませんか。久しぶりに会っていろいろ話したいです。

敬具